

陸域の土地改変と沿海域の環境

代表理事 宮村 忠

梅雨の合間をぬって、久し振りに知床半島と根室半島を巡ってきた。格別の課題をもった踏査というわけではなかったが、沿岸環境について興味深い見聞をした。

知床半島の玄関口に当たる斜里町市街地は、斜里川下流にあって、河口には斜里漁港を配している。斜里町からみる水源地の斜里岳は晴れた日に残雪をうかべて、ここから北東に知床半島の美しい絵柄を映し出してくれた。斜里川流域に農業開拓が始まったのは、130年ほど前のことである。「海」から「土地」の生活に舞台が移った。その後、斜里川の原野は、次々と入植者がやってきて畑地への開拓を進めた。大正11年には斜里町に鉄道が開通し、社会基盤整備も次第に整いはじめ、市街地も形成されて土地の改変は多に進んだ。土地利用の進展は洪水で大きな被害を出すほどになった。昭和16年洪水では、耕作地の浸水が2971ha、浸水家屋197戸の水害となった。そこで、斜里川の改修工事がはじまった。この改修工事は第2次大戦による中断を経て、昭和26年に本格的な改修工事の再開となり、昭和38年に完了した。河川改修に合わせて、斜里川河口の改良も行われた。現在、斜里町の基幹産業となっている漁業基地が整えられ、第2次大戦後定置網漁法による漁田開発が急展開し、漁港整備も拡充された。平成23年、斜里町は過去最高の漁獲高137億円を記録し、サケ・マスの漁獲高全国一となった。漁田開発は、沿岸魚の保全が前提となる。そのため漁業者は斜里川の河川改修、維持管理に強い関心を示す。魚が逆上り・下りできる河川は、漁業にとって重要な要素となる。斜里川流域に生活する農民と海で生活する漁民とが斜里川への視点を共有している。農業開墾と新たに漁業基地となった斜里町は、「半農半漁の町」として、知床半島の核となっている。かてて加えて今年も国立公園50周年・世界自然遺産10周年に当たる。斜里川への関心を高める機会をつくった全国22番目の国立公園指定と国内3番目の世界遺産に登録されたことが、斜里川への認識を深めたようだ。

斜里町の半農半漁の社会条件が、サケ・マスの環境保護に有利に働いているというはなしである。この紹介を聞いたとき、讃岐平野の溜池地帯と想いが重なった。香川県の讃岐平野は有数の溜池地帯で知られる。ここでは親溜・子溜・孫溜の三連セットとなっていて、厳しい水利慣行のもと、灌漑用水の調整を行っている。この溜池地帯は、予備放流の実践地でもある。予備放流とは、降雨の初期段階から、貯水量を低減させ、ピーク時の貯水を可能にさせる手法で、洪水対策に有効である。しかし、水利用に

とっては不安が付きまとい、もし、貯水量が復元しなければ、溜池の目的を失ってしまう。予備放流を成立させるには、洪水と水利用対策に当たる両者に強い絆がなければ不可能で、実践が困難である。讃岐平野では溜池を中心とした水利関係者と、水防を担当する消防団の家族構成が一致する。高齢の水利組合員と若い消防団員が親子関係という組み合わせである。対立関係が信頼関係と一致するのである。

根室半島の付け根に当たるところが広大な根釧台地である。原生林が覆う台地と湿原が分布し、根釧原野と呼ばれてきた。昭和30年代から40年代にかけて、大規模農業を標榜して、全国に知れわたった。同じように、大規模農業を標榜した秋田県の八郎潟と並んで話題を呼んだ。八郎潟は、大規模水田農業のモデル地として入植者を募集し、根釧原野は大規模酪農の夢をかけた。不幸にも、八郎潟の干拓は完成をまらずに過剰米の重荷を背負わされた。一方、根釧原野の酪農振興は、近代的草地開発も加わって、現在牧草地面積・乳牛飼育頭数は北海道全体の3分の1を占めるほど全国最大の酪農地帯へと発展している。

根釧パイロットファームの建設は、世界銀行からの融資を受け、国・農地開発機械公団（後に農地開発公団）、北海道の三者が一体となって事業が進められた。釧路・根室地域（根釧原野）に本格的な農業地帯が創出され、土地利用が一変することとなった。こんな土地利用の変化は、当然低湿地を流れる河川に、大きな影響をあらわした。古くから、重要な資源となっていたサケ・マス漁獲量の低減は大規模農業地帯の農民にも不安をもたらせた。沿岸漁業は季節労働で、とくにサケ・マスの捕獲は、農民の兼業部門でもある。家畜排泄物の大量発生が公共用水域に流出すれば、貴重な資源を失うことになる。その影響に気づき河川沿岸海域の環境悪化をとりもどすべく、様々な手段を講じてきた。畜産関係の処理場を整備し、河川改修とともにサケ・マスの捕獲場の改良・ふ化場の増大、肥培灌漑による家畜排泄物の有効活用、水質浄化型の排水路の整備など、環境への認識を高めている。標津川や西別川など、半農半漁の農業地帯が生み出した絆が漁業を酪農と並び立つ基幹産業への期待をもたせているようだ。古代にオホーツク海沿岸を南下してきた海洋民族はオホーツク文化の人びとと呼ばれ、クジラ・トド・アザラシなどを主な生活の糧としていたようだ。斜里川や標津川などでは古代の優れた海洋狩猟民族の流れを想うように、沿海漁業が基幹の産業でありつづけ、沿岸環境の主役を演じさせているように見聞してきた。